『社会科学ジャーナル』30(3)〔1992〕pp.117-142
The Journal of Social Science 30(3)〔1992〕 ISSN 0454-2134

ハンガリーにおけるハイドゥー研究：その課題と展望

―ナジとダーヴィドゥの二論文の比較を通して―

戸谷　浩

はしがき

筆者は，旧稿において，1969年に至るまでの，ハンガリーにおけるハイドゥー研究の諸成果を整理した。[1] そこでの整理を今一度繰り返せば，ハイドゥーとは，近世ハンガリーに存在した，武装化した「牛追い」を主たる起源とする武装集団の総称であった。彼らは国家にとっても無視することのできぬその軍事力をもって，時の支配階層に奉仕し，その軍事的貢献に応じて彼らには免租特権（「ハイドゥーの自由」）や定住地が付与された。ただ彼らに関して注目しておくべきは，16世紀末以降，すなわち国がオスマン，ハプスブルクの両帝国との長期にわたる戦乱に巻き込まれてゆく頃から，「牛追い」や零細農民に加えて，それまでは純粋な意味で農民であった者までもがハイドゥーの行動に呼応するようになっていったという事実である。ハイドゥーの社会的性格は，この時点で大きく転換したのであった。ところが，従来のハイドゥー研究においては，この“転換”の意義は必ずしも十分には考慮されてはこなかった。筆者はこの事実を，旧稿において，「不整合」と「断絶」という二つのキー・ワードの下に指摘した。[2] 「不整合」とは「ハイドゥー」という呼称が指し示す実体の一貫性が失われていることを言い，「断絶」とは本来ハイドゥー研究の中心課題であるべき定住問題に対して，従来相応の取り組みがなされてこなかった事実を含意する用語であった。いずれにせよ，1960年代末までに形成されたハイ

ドゥーに関するいわゆる“定説”には重大な欠陥が潜んでいたのであった。

しかし，この“定説”の根幹は，ハンガリー史学界においては，幸か不幸か，今日に至るまで大幅な修正というものを“ほとんど”被ってきていない。しかしこのことは，ハイドゥー研究にはもはや修正や発展の余地が全く存在しないということを意味するものでは決してない。現実はむしろその逆であろう。だが，それは同時に，1970年以降，研究進展への努力が全く怠られたということを意味するものでもまたない。[3] 70年以降に出されたハイドゥーを扱った諸研究の中には，従来の“定説”に対し根本的な見直しを迫るべき結論を導き出しているものさえも，確かに存在していた。先に“ほとんど”と記したことの真意は，実はこの点にあった。1975年に，ダーヴィドゥ・ゾルターンが発表した「ハイドゥーの定住」と題された論文は，まさにそうした，ハイドゥー研究に一大転機をもたらしえた新研究の筆頭であった。[4] しかし，新たな視点を含む彼のこうした研究も，ハンガリー史学界においては，その後のハイドゥー研究に対し有益に消化されることもなく，いわば萌芽のままに見捨てられた形で現在に至っているのである。

興味深いことに，同じ1975年には，ダーヴィドゥの論文とは極めて鮮明な対照をなすもう１つの論文，ナジ・ラースローの「ベトレン・ガーボルの対ハプスブルク戦におけるハイドゥー」も発表されている。[5] ハイドゥーの内に農民的な要素を見出し，一貫して人口統計学的な考察に終始するダーヴィドゥとは対照的に，ナジはハイドゥーの持つ戦士的な要素に着目し，それを全ての考察の基点に据えることから始める。結果、両者の見解は，想定すべきハイドゥー像とその定住の意義といった点において，もっとも鮮明なる相違を示すこととなった。私見では，ハンガリー史学界にとって，この1975年こそが，従来のハイドゥー研究に対し，本質的な反省を加えうる最大の機会であったように思われる。だが，奇しくも同年に発表されたこれら二論文によって示された著しい見解の相違を埋めようとする試みは，当時のハンガリー史学界においては，ついぞなされることの

なきままに終わってしまったのである。

ナジとダーヴィドゥとの間に横たわるこの見解の相違は，ハイドゥー研究に存する「断絶」と「不整合」に対しても，決して無関係であるようには思われない。いやむしろ，その相違は，この「断絶」と「不整合」に起因するもの，その反映にほかならないのではないかとさえ思われるのである。このような視座の下，以下の2節においては，まずハイドゥー研究における新潮流の行方を確認するために，ナジとダーヴィドゥの両論文の中で示されるそれぞれのハイドゥー像と定住に関する見解をやや詳細に紹介することに努めたい。そしてその後に，ハイドゥー研究が抱える「断絶」と「不整合」の問題の解消に向けての，筆者なりの見解を提示することとしたい。

1．ナジ・ラースロー論文

基本的に戦史家であるナジ・ラースローには，戦乱の16～17世紀を生き抜いたハイドゥーに関する著書も多い。[6] その彼が，1975年に発表した論文「ベトレン・ガーボルの対ハプスブルク戦におけるハイドゥー」の中で，自身のハイドゥー観を披露している。

ナジはまず，「農奴的隷属から解放されたいという願望と自由農民的な生産的労働に積極的に加わろうとする努力」[7] とは区別されねばならないという点を強調する。彼は，後者のような目的を追求した人々がハイドゥーの中に存在していたことを，完全に否定することはできないとしながらも，こと特権ハイドゥー（kiváltságoltak）に関する限り，彼らの大部分がそのような目的を追求した人々から構成されていたとは，どうしても考えられないと主張するのである。その根拠としてナジは，「ボチカイ・イシュトヴァーン，バートリ・ガーボルおよびベトレン・ガーボルが，戦場において最も優れた―すなわち，最も戦争を熟知し，経験に富み，そして最も勇敢な兵士に特権を付与した」[8] 点に触れ，ゆえに特権を授けられたハイドゥーとは，ごく最近農民的な生産的労働から切り離されたような

人々ではありえないと説くのである。ナジのこの議論の根底には，彼のある確信が横たわっている。その確信とはすなわち，ナジ自身の兵士像にほかならなかった。彼によれば，有能な兵士とは決して一朝一夕に生み出されるものではなく，兵士とは幼少の頃より長き歳月を費やし，兵士に求められる様々な事柄，例えば武器・戦術に関する軍事的知識，あるいは戦場における経験等を，徐々に学び取り，積み重ねていってこそ初めて誕生しうるような存在なのであった。「お決まりの農奴的な生産的労働に従事する人々の世界」と，「戦場において銃を担いで部隊戦（kötelékharc）を戦う兵士の世界」とを互いに遠く隔たったものとして捉える彼の立場は，戦史家であるナジに特徴的な視角でもあった。[9]

ナジは，一般に説かれる，農民が専従兵士（hivatásos katona）へと身を投ずる動機，すなわち後者の高い生活水準の魅力や農民居住地の荒廃というような理由は，実際には，農民たちを専従兵士であるハイドゥー[10]の列へと誘う力としては必ずしも十分ではなかったとして退ける。[11] 従って，ボチカイ期のハイドゥーに対してナジが描くイメージというものは，当然以下のようなものとなる。

「ボチカイ期のハイドゥーは以下のような人々の中からのみ出現しえた。すなわち，農奴のそれよりはるかに自由で活動的，つまりあえて言えば冒険的な生活様式を，それがかなり不安定な生活をもたらすものであっても，父親譲りの職業として，あるいは農奴の労働，生活環境の否定として選び取った人々の中からである。ゆえに，非貴族身分の人間に専従兵士への道を選択させた根本的な動因とは，圧倒的大多数の場合，生まれと個人的な特質によるものであって，自由農民的な生活様式や労働に対する欲求などではなかったのである。また，（後者をハイドゥーとなる動因と見なすことは）ボチカイによる定住以前には，なおさら考え難いことであった。」[12]

これらの人々にさらに，「困窮化し，無宿（földönfutó）となったかなりの数の貴族」が加わった社会集団こそが，ナジの考えるハイドゥーなのであ

る。

次に，ハイドゥーの定住に関するナジの見解について見てみたい。ハイドゥーの定住問題に関して，ナジがまず第一に抱いた疑問が，専従兵士の生活様式を選び，戦闘に長けたハイドゥーたちにとって，農民的な生活様式や労働―すなわち定住すること―が，すぐさまとりたてて魅力的なものとなりえたであろうかという疑問であった。この問題に関連してナジは，ボチカイの下でハイドゥー自身が定住のイニシアティヴを取ったとする考え[13]を退け，彼らは何か月も未払いであった給料の代償として，次善の策として定住を受け入れたのであるとの自説を展開する。自説を補強する意味でナジはさらに，定住を受け入れるに際しても，ハイドゥーたちを魅了しえたものは，例外なく「貴族の地位の獲得」なのであって，「取得した荒蕪地の耕作の可能性」などではありえなかった点を強調する。ナジによれば，自らのこの考えは，特権を得たハイドゥーの大半が，取得した土地にはあえて定住せず，放浪を続けたという事実によっても，強く支持されるものなのである。[14] しかし，定住の実態に関しては，この論文の中では必ずしも本格的な取り組みはなされておらず，ただ「最近逃亡したものの，軍事的奉仕には明らかに不向きな農奴たちに，その土地を耕作させようとしていた」[15] との簡単な記述がなされるだけに止まっている。

ナジのこの論文は，もちろんナジ独特の史観に貫かれてはいるものの，その議論の大筋は明らかに，筆者が旧稿において整理した1960年代末に至るまでのハイドゥー研究の枠組みの内側でのみ行われている。[16] ナジのこの論文をダーヴィドゥ論文との比較・対照の素材として選んだ理由は，1970年代に入って以後の比較的新しい研究でありながら，従来の研究の枠組みを忠実に踏襲しているものの代表として，彼の論文が最も適当であると判断したがためでもあった。ハイドゥー像とその定住に関するナジの見解に対する，筆者なりの批判的考察を展開する場は，第3節へとその舞台を譲りたい。しかし，第3節において批判の対象とされるのは，決してナジのハイドゥー論だけではありえない。ナジ論文はあくまでも従来のハイ

ドゥー研究の姿勢を示すものとして取り上げられるにすぎず，ナジ論文に対する批判・提言はとりもなおさずハイドゥー研究全体への批判・提言であることを，ここで改めて確認しておきたい。

2．ダーヴィドゥ・ゾルターン論文

元来が人口史家であったダーヴィドゥ・ゾルターンとハイドゥー研究との接点は，ハイドゥードログ（Hajdúdorog）とハイドゥーハドハーズ（Hajdúhadház）の両町史が編纂された際に，彼がその人口史（népesedéstörténet）の章を担当した時点に遡る。[17] この作業のためにハイドゥー研究の一連の成果を通覧する機会を得たダーヴィドゥは，この時，従来の諸研究の中に潜む致命的な弱点の存在に気付き，論考「ハイドゥーの定住」の執筆の必要性を痛感した。彼は，「十分に解明されておらず，これまで未解決，あるいは取り上げられることのなかった問題に解答を見出す」[18] ことこそが，自らの論文の課題であるとし，以下の5つの問いを設定し，論文の冒頭に掲げている。[19]

① 特権を得た，ボチカイのハイドゥーたちは，どの集落[20] を得たのであろうか？　また，それは何時のことであったのか？
② そうした集落の受容能力はどれほどであったのか？
③ ハイドゥーたちが定住したのは，荒廃無人の地域であったのか，一時的に放棄された居住地であったのか，あるいはまた終始居住者のいた集落であったのか？
④ 定住したハイドゥーの実数は，どれほどであったのか？
⑤ ハイドゥー町の人口は，17～18世紀にはどのように推移したのか？

設定された5つの問いは，果たせるかな，全てハイドゥーの定住に係わるものばかりであった。ダーヴィドゥのハイドゥー研究に対する素朴な疑問は，定住問題の一点に集約されたわけである。以下本節では，ダーヴィドゥの議論の要点を，ナジの見解との対比に留意しつつ，できうる限り簡

潔に取りまとめ，紹介してゆくこととしたい。

まず，ボチカイに仕えたハイドゥーたちがどこに定住したのかという問題とその時期の確定に関しては，結論のみをここに示しておけば十分であろう。すなわち，最終的に彼らは，ベセルメーニュ（Böszörmény），ナーナーシュ(Nánás)，ドログ，ハドハーズ，ヴァーモシュペールチ（Vámospércs)，ソボスロー（Szoboszló)，ポルガール（Polgár）の「7つのハイドゥー町」に定住した。そして，遅くとも1608年には，この内のいくつかにおいて「ハイドゥーの自由」が実践されていた。「ハイドゥーの自由」の実践開始時期を確定したことは，ダーヴィドゥの成した功績の1つであった。[21]

各ハイドゥー町の受容能力の推定は，それぞれの町の16世紀後半の人口の算定を試みることから，まずは始められねばならない。表1は，後の7つのハイドゥー町の，戸数に関する諸史料—1543年から1621年にかけて—を一つの表に取りまとめたものである。この表を基にダーヴィドゥは，16世紀後半のハイドゥー町の人口の算定を試みる。ここでは算定の過程をできうるかぎり正確に伝えるために，引用はやや冗長になるが，当該箇所をそのままの形で抜き出し，紹介してみたい。

「（7つのハイドゥー町の）人口を得るためには，（史料に）記載された納税者の最高値を家産保有者集団（a háztulajdonnal rendelkezők köre）に同定するとした上で，家長数を6～7倍しなければならない。これより，ベセルメーニュの195人，ドログとハドハーズの60人，ナーナーシュの90人，ポルガールの75人，ソボスローの145人，そしてヴァーモシュペールチの25人の納税者[22] を基にして，650戸に合計3,900～4,500人と算定することができる。しかし，詳細な地域研究の諸成果によって，完全な人口に至るためには，計算もれの人々(kihagyottak）のために（算定値の）50%を加えなければならないという事実をわれわれは知っている。これらを含めると，まだ世紀末の大きな荒廃が訪れる以前，すなわちハイドゥーの定住に先立つ数十年間には，ベセルメーニュ

表1「7つのハイドゥー町」における戸数の変化

集　落　名	1543	1549	1572/7	1582	1598	1621
Böszörmény	62	96	—	195	—	—
Dorog	26	50	—	—	22	—
Hadház	23	40	53	44	59	—
Nánás	27	29	83	38	30	—
Polgár	34	70	72	65	34	—
Szoboszló	103	137	145	107	58	25
Vámospércs	3	4	—	—	21	—
単位	戸	戸	徴税	徴税	家	戸

出所）*Dávid*:A hajduk letepitése, 10 old より作成

区域に約1,750～2,000人，ドログに550～600人，ハドハーズに500～550人，ナーナーシュに800～900人，ポルガールに700～800人，ソボスローに1,300～1,500人，ヴァーモシュペールチに200～250人の住民がいたことになる。合計で5,800～6,600人。これは（サボルチ）県全体の人口の15～18%に上った。」[23]

ハイドゥーの定住は，紛れもなく，「県内の以前から人口の多い，大きな影響力をもった集落を対象に」行われたのであった。

一方，ハイドゥー町の領域面積に関しては，1930年の7町の総面積が1,491km^2[24]，またヨーゼフ2世（Joseph II, 1765—90）期の，ポルガールを除く6町の合計が966km^{2}であったとの数字が知られている。[25] しかし，これらの数字に対してダーヴィドゥは，その数値の中にはかつての荒蕪地，森林開墾地，あるいは定住期初期にはハイドゥーが入植を行わなかった集落等が含まれている点を指摘し，17世紀初めにハイドゥーの定住が実際に行われた地域の総面積は，実は500km^{2}にも満たぬものであったとの見解を示すのである。[26] そして，銘記しておくべきは，彼が，この規模の領域には，先に算定した5,800～6,600人を遥かに上回る数の人間を受け入れるだけの能力は，決して存しえないと断言している点である。[27] 後に詳しく見るように，この視点は彼の議論を理解する上で極めて重要な要素となっ

てくるのである。

定住期のハイドゥー町の様相に関しては，従来，ナーナーシュとドログを荒蕪地として明記するボチカイの特権状[28]，あるいは租税台帳（dikális összeírás）に頻出する「荒蕪地」（*deserta*）の文字を拠り所として，状況を相当に疲弊したものとして描く傾向が強かった（表２）。[29] これに対しダーヴィドゥは，租税台帳の記載のみには捕らわれず，むしろ十分の一税台帳（dézsmajegyzék）や土地台帳（urbárium）の記載にあえて注目する。例えばハドハーズの場合，表２が示すように，その人口は租税台帳においては先細りになってゆくものの，後二者においては確かに，「1593年に至るまで，基本的に以前と変わらぬ，かなりの人口の存在を示している」[30] のである。ゆえに彼は，「世紀末，打ち続く戦闘の中で，人口はおよそ半減する。しかし，ハイドゥーの定住前夜においても，ハドハーズが無人化するようなことは決してなかった。租税台帳の記載は，単に徴税という観点から見た場合の，悲惨な物的状況に関連したものにしかすぎず，“*deserta*”という概念の誤った解釈に依拠したがゆえに，多くの人々がこれまで信じてきてしまった集落の完全なる無人化というようなことを意味するものでは決してなかった」[31] と結論づけるのである。ダーヴィドゥはさらに，７つのハイドゥー町のそれぞれについて，16世紀と18世紀の諸史料に現れる姓，それも *Kis, Nagy* 等の一般的な姓ではなく，*Sillye. Csőregh* といった特徴のある姓に着目し，こうした姓の連続性を両史料の上に跡づけてみせるのである。[32] 要するにわれわれは，ハイドゥー町の人口やその受容能力を測ろうとする際にはもはや，以前からそこに居住し続けていた住民の存在を無視するわけにはゆかなくなったということである。[33]

ダーヴィドゥによって問題提起をされるまでもなく，定住したハイドゥーの実数に関する問題は，これまでにも多くの研究者によって取り上げられてきた。しかし，いずれの先行研究においても，史料に現れる「１万人のハイドゥー」が定住したという事実を，ほとんど無批判に自明の事実として受け入れる点では一致していた。だが，史料上の数字だけを基点

表2　ハドハーズにおける納税家長総数の変遷

年	租税台帳	1/10税台帳	土地台帳
1555	40	—	—
1564	—	—	38
1567	14	—	—
1570	—	41	—
1571	17	—	—
1572	24	54	—
1574	21	—	—
1575	—	31	—
1576	21	—	—
1577	—	43	25
1578	5	—	—
1580	—	29	—
1581	—	56	48
1582	6	45	—
1583	des.	37	—
1589	des.	44	—
1593	des.	39	—
1597	des.	23	—
1598	des.	18	—
1599	des.	9	—
1600	des.	18	—
1602	des.	27	—
1605	des.	25	—

出所）*Dávid*: A hajduk letepitése, 13 old より作成

に据え，ハイドゥーの定住を論じようとしたこうした諸研究が，例外なく，現実問題としては首肯しかねる結論に行き当たっている状況[34]を見たダーヴィドゥは，基点をあえて別の場所に取り，定住ハイドゥーの実数の問題を考えてゆこうとするのである。

ダーヴィドゥはまず，ハイドゥー社会の高い人口増加率[35]，各集落に留

まっていた以前からの居住者の存在，そして多数の流入者の存在の3点を，自らの考察の基点に据える。つまりダーヴィドゥは，人口統計学的には，定住期のハイドゥー町は人口の増大が著しく助長される環境の中にあったという視角から，もう一度ハイドゥーの定住問題を捉え直してみようと試みたわけである。彼の推計では，純粋に人口統計学的に考えて，上記のような人口増大への好条件の下であれば，家族を含め4万人のハイドゥーを受け入れた「7つのハイドゥー町」の人口は，半世紀後には10万人ほどに達していたとの推定も成り立ちうるという。[36] もちろんこの場合，ハイドゥー町の規模は一様ではないので，例えばベセルメーニュに3万人，ヴァーモシュペールチを除く5つのハイドゥー町各々に1万人強というように，10万の人口を振り分ける必要があることは言うまでもない。ところが，同時代の国王自由都市の人口を参照するならば，10万人という人口試算の妥当性はたちまち大きな後退を強いられてしまう。なぜなら，17世紀末，エペリェシュ（Eperjes, スロヴァキア名 Prešov）の人口は2,300～2,700人程度，ポジョニュ（Pozsony, スロヴァキア名 Bratislava）ですら4～5千人の規模であったと言われており，時代を下ったヨーゼフ2世期でさえ，大半の国王自由都市の人口は5千人にも満たぬものであったからである。[37] こうした点からダーヴィドゥは，人口試算の大前提となった，家族を含めて4万人のハイドゥーが定住したという事実自体に誤りがあったとの確信に最終的に到達する。[38] 彼のこの結論は，「1606年以降，ハイドゥー勇士のほんの一部だけが6つのハイドゥー町に身を潜めた」が，「他の多くはむしろビハル県に定住した」とするポールの見解にも符合するものであった。[39]

それではダーヴィドゥは，ボチカイの特権状の記述をどのように解釈するのであろうか。この点に関して，彼は次のような見解を明らかにする。

「（特権状に）かなり曖昧に表記された一群の人々（ハイドゥーたち―戸谷）の全てが，彼らに与えられた―けれども居住者のいた―集落に収まり切らないことは，特権を付与した人々も承知していたに違いない。

従って，次の点は考慮されねばならない。すなわち，6百，1千，あるいは1万のハイドゥーに対し，自由に加えて，単独または複数の集落をも集団的に与えるという場合，全員の定住が不可能であるということは，当初より認識されていたという点である。・・・家族を含め3～4万人と推定されるハイドゥーの定住は，彼らに許された地域内では実現すべくもなかった。ボチカイの独創的な構想も実行に移しえたものは，その一部分だけであった。そして彼の急逝が，計画の実現性をいっそう低いものとしてしまったのである。」[40]

ダーヴィドゥのこの指摘は，史料上の数字のみに呪縛され続けた従来の研究姿勢に対する警鐘であるとともに，史料に対する批判的で，かつ柔軟なアプローチの必要性を訴えたものとしても評価したい。

残された問題は，定住したハイドゥーの実数を確定することと，17～18世紀のハイドゥー町の人口の推移を跡づけることである。ダーヴィドゥによれば，定住期の7つのハイドゥー町の人口は，約1,200家族，6,400～7,800人の規模であったという。その内訳は，ハイドゥーの定住以前からの住民数が1,600～2,000人，実際に定住したハイドゥーとその家族が4,800～5,800人であったと推測されている。つまり，付与された土地に実際に定住したハイドゥーは，ボチカイによって特権を付されたハイドゥーの約10分の1にすぎなかったということになる。従来の算定値に比べるとかなり低い値となったその人口も，17世紀前半，ハイドゥー社会が人口増加に有利な環境の中にあったことが主因となって，1660年までには1万3千人へと膨れ上がる。この後ハイドゥー町の人口は，戦禍に見舞われたり，ペストの被害を被ることとなるが，1787年までには28,376人（ポルガールを除く[41]）にまで増大する。7つのハイドゥー町の人口が，従来の研究において想定されていた4万という数字に達するのは，やっと19世紀に入って後のことであった。[42]

筆者は，旧稿において，ハイドゥー研究にある種の「断絶」が存在し，それがハイドゥーの定住に関する研究が十分に深められていない点に由来

するという事実を指摘した。[43] 実際，定住に関する研究の立ち遅れは，定住以前および定住以後のハイドゥーに関する研究の諸成果と比較した場合，よりいっそう鮮明に浮かび上がってくる。すでに旧稿において概観したように，16世紀のハイドゥーに関する叙述，すなわちハイドゥーの起源に関する叙述には一貫性があり，それは十分に説得的なものであった。[44] また，17世紀以降のハイドゥー町の形成過程に関しても，史料が16世紀以前のそれに比較してかなり豊富になることもあって[45]，実証的な研究が広く行われてきた実績が存在する。[46] この狭間にあって唯一，定住に関する研究だけが，史料の欠如と狭隘なハイドゥー観に災いされ，ハイドゥー社会の実態からも遊離した底の浅いものとなってしまっていたのであった。

ダーヴィドゥの研究は，こうした状況の中でハイドゥーの定住問題に真正面から取り組んだ初の試みであった。それでいて，その人口史的，人口統計学的な視点に基づいた彼の論法は，固定化，「定説」化しつつあった従来の研究成果の不合理を大胆に指摘して憚らず，「断絶」・「不整合」を抱えたハイドゥー研究全体の見直しの必要性をも暗に要求するものであった。こうした点を鑑みるまでもなく，彼の論文の意義はこれまで，やはり不当に低く評価されてきたと言わざるを得ない。彼の論文から，ハイドゥー研究自体がより以上に触発されてしかるべきであったように，筆者には思われるのである。

3．ハイドゥー研究の課題と展望—むすびに代えて—

先にも何度か指摘してきたが，筆者は，ハイドゥー研究の抱える最大の問題点は，埋められることのない「断絶」と，正されぬままの「不整合」がハイドゥー研究の中で内在化されようとしている点にあると理解している。そして，この点についても，すでに旧稿において触れたが，これらの「不整合」や「断絶」は，直接的には，従来のハイドゥー研究に潜む狭隘なハイドゥー観や，定住の実態に目を向けようとしないその研究姿勢にそれぞれ起因するものであった。[47] 従って，従来のハイドゥー研究の成果を

補完しようとするならば，以下のあまりにも基本的と思われる２つの問いに対し明確な解答を示すことが，何よりもまずわれわれに求められてくるのである。

① 16～17世紀の世紀転換期において，ハイドゥーと呼ばれた人々の実体は，一体どのような人々によって構成されていたのか？
② 「７つのハイドゥー町」に対し実際に定住を行ったのは，どのような人々であったのか？

本節では，停滞するハイドゥー研究への一提言となることを祈念しつつ，これらの問いに対し一定の方向を指し示すこととしたい。同時に，それをして小論への結びに代えることとしたい。

問①から順に考えてゆきたい。戦士的性格が強いはずのハイドゥーの指導者たちでさえ，実はハンガリーの東部，北東部の出身，つまりは農民的性格のいまだ色濃い存在であったとするベンダの結論に対し[48]，ハイドゥーを「専従兵士の集団」と見なすナジの見解はそれに真向から対立するものであった。[49]「もちろん，特権ハイドゥー自体，ましてやハイドゥー全体を均一であると見なすことは許されることではない」と，ハイドゥーの多様性に関しては，ナジ自身が配慮を怠ることのないようにと努めてはいるものの，「国王国境城塞ハイドゥー，領主ハイドゥー，あるいは最も不均質な構成の自由ハイドゥーが，ハイドゥー町の特権を付与された居住者たちと同一の社会的カテゴリーを形成することはなかった」との立場を固持するナジの議論は，戦士的性格の強いハイドゥーへの傾斜からどうしても脱することができないでいた。[50]

ナジに代表されるような，こうした狭隘なハイドゥー観に立つかぎり，ハイドゥーの歴史を統一的に把握しようとする試みは，やはり極めて困難なものにならざるを得ない。「牛追い」や零細農民を起源とし，16～17世紀の世紀転換期においても，多くの農民の合流が確認されているハイドゥー

に関して，農民的な性格を消去した上で議論を進めようとする態度は，17世紀に入って後のハイドゥー町における農業経営の進展等を鑑みるまでもなく，筆者には決して有意なものであるとは思われない。[51] 仮に，農民的な生活への復帰を意味する「定住」が戦士的性格の強いハイドゥーにとって，全く魅力に欠けるものであったとの立場に固執するのであれば，彼らが定住を受け入れてゆく過程に関しては，より詳細な研究が提出されてしかるべきであろう。さもなければ，ハイドゥーの社会的性格にまつわる「不整合」は，その修正の機会を永遠に奪われてしまうということになるのではなかろうか。

16世紀末から17世紀初めにかけて活躍したハイドゥーをどのような存在として捉えるべきかという問題に関しては，ラーツ・イシュトヴァーンがすでに１つの解答を示している。

「もしわれわれが，次のような立場を取ったとしても，おそらくわれわれの結論があまりに無謀なものとなることはないであろう。つまり，ボチカイは，一部のハイドゥー――少なくとも，彼らの意志について諸史料が実証している指導者たち――との傭兵関係を維持してゆきたいという考えに対し，定住構想を思い描いたのであるという立場である。しかし，このことは決して，一般のハイドゥーや新たに加わってきた人々の間で，――ベンダが考えるような――自由農民的な生活への要求が強く息づいていたという可能性を閉ざすものではないのである。・・・いずれにせよ私は，現在まだ適切な史料による照合がほとんどなされえないままの私見を明らかにしてみたい。すなわち，1604年の時点におけるハイドゥーには２つの起源があったのである。一方は長期にわたって軍事的行動に従事し，引き続き傭兵の生活を望んでいたハイドゥーたちであり，もう一方は十五年戦争期にこの前者に巻き込まれていった人々であった。」[52]

要するにわれわれが銘記すべきは，ハイドゥーが戦士的な性格の強いハイドゥーと，農民的な性格の強いハイドゥーの２種類の小集団から構成さ

れる社会集団であったという事実なのである。性格の異なった2形態のハイドゥーの存在を想定すること自体は，確かに，従来の研究においても，殊にハイドゥーの出身の問題を論ずる際に，しばしば言及されてきており，その枠組み自体決して目新しいものでもない。しかし重要なのは，こうした，ハイドゥーに対して一種寛容な認識というものを，定住以後のハイドゥーの歴史を見てゆく上においても，基本的な視点として常に保持し続けてゆくことなのである。たわいもないこととも思われる，拡大されたハイドゥー観の導入によって開かれる視野は，思いのほか広大なのである。

翻って考えるに，定住に対しハイドゥーがどう対応したのかという問題は，この2つの区分—すなわち定住にまるで魅力を感じず，引き続き戦闘と放浪の生活を続けたいと考えていた者と，農奴的な隷属状態から逃れるためだけに立ち上がった，基本的には農耕生活に復帰することを望んでいた者の区分—を認識することなしには，少なくとも解決することのできぬ問題であるように思われる。国境城塞において兵士としての生活を続けたハイドゥーたちや，ボチカイから許された土地への定住を敬遠し，最終的にビハル県に定住したハイドゥーたちは前者の代表であろうし[53]，数万に上ったボチカイ期のハイドゥーの大部分は，つい最近まで農民であった点を鑑みれば，おそらくは後者に属していたものと思われる。[54] ナジのハイドゥー観の欠点は，前者に傾倒するあまり，後者の存在自体をも顧みることができなくなってしまった点にあった。「農奴的隷属状態から解放されたいという願望と自由農民的な生産的労働に積極的に加わろうとする努力」とは区別されねばならない，というナジの主張自体は正しい。[55] しかしそれは，そうした「努力」を惜しまないハイドゥーの存在をも承認した場合にのみ，真に正しいものとなるのである。

次に，問②に目を転じてゆきたい。その際，上でも少し触れたが，問①においてわれわれが得た解答は，問②を考える前提としても重要な要素となってくる。ハイドゥーの歴史を統一的に見据えてゆこうとする場合，拡大されたハイドゥー観を導入することは，どうしても必要な作業となって

くるからである。

前節において見たように，ハイドゥーの定住に関するダーヴィドゥの研究は，実に新鮮なものであった。定住期のハイドゥー町は，4万にも上る規模の人口移入に耐えうるだけの受容能力を持ち合わせていなかったこと，各ハイドゥー町には定住以前からの住民も引き続き居住していたこと，そして実際に定住したハイドゥーの実数は，定住を許されたハイドゥーの10分の1にすぎなかったこと等々，彼が人口統計学的な手法を駆使して導き出したいくつかの結論は，従来なされてきた定住に関する諸研究が，いかに机上の空論であったのかを，図らずも暴露する形となった。そのダーヴィドゥが，問②に関連して，次のような事実を指摘している。

「特権状において名を掲げられた副官（hadnagy）の家系が，（ハイドゥー）町の後世の社会の中に見出されないという点は注目に値する。・・・（中略）・・・特徴的な名をもつ副官（例えば*Csomaközi András, Kövi Miklós* など）を，彼らに付与された集落の指導者の中に見出すことができないのである。それどころか，これらの姓は，ハイドゥー町社会の中に現れることさえないのである。」[56]

ボチカイより特権を付与されたハイドゥーの多くが，結局は7つのハイドゥー町への定住を行わなかったという，ポールやナジによってもすでに指摘されているこの事実は，実際に定住したハイドゥーの実数が約950人であったとの試算を示すダーヴィドゥによっても，幾度となく言及されてきた事実でもあった。[57] 彼らの一致した見解と，先に提示した定住に対するハイドゥーの2形態の対応の妥当性を前提とするならば，7つのハイドゥー町に実際に定住した人間としては，全面的にではないにせよ，戦士的性格の強いハイドゥーは，まずはその候補から除外することが許されるのではなかろうか。

それでは，一体誰が定住したのであろうかという問題になってくるが，仮にわれわれが従来通りの狭隘なハイドゥー観に呪縛されたままであるならば，ハイドゥーの定住に関する議論はこの時点で立ち止まらざるを得な

くなる。なぜなら，特権は戦士的性格の強いハイドゥーに与えられたものであるにもかかわらず，その彼らが定められた土地に定住することなく，放浪と戦闘の生活を続けていたことが確認されてしまったがためである。この場合，17世紀以降のハイドゥー町の歴史は，「無」から派生したという奇妙な結論に漂着してしまうことになる。従来のハイドゥー研究においては，この矛盾に真正面から取り組む研究はついに現れず，結果的にハイドゥーの歴史には，覆うべくもない「断絶」が刻み込まれることとなってしまったのである。

しかし，従来のハイドゥー研究が抱える問題点の克服を目指すわれわれは，本節においてすでに，拡大されたハイドゥー観の導入の必要性を確認している。また，ハイドゥーの定住がより柔軟な視点から検討されねばならないことも同時に学んでいる。従って，従来の研究の立場からは思いも及ばない，ダーヴィドゥの定住の主体に関する次のような見解も，雨水が乾いた大地に染み込んでゆくかのごとく，極めて自然なものとして理解することができるのである。

「集落（７つのハイドゥー町—戸谷）の本来の居住者は，後にはハイドゥーの自由の完全付帯者，ハイドゥー町社会の同格の構成者，さらにはその指導者となった。このことは，以前からの居住者と定住者との間に重大な対立が存在しなかったことを意味する。さらにこのことから，集落にやって来たハイドゥーたちは，そこに住む人々にとって全くの他人であったわけではなく，大部分はその土地からボチカイ軍に加わっていった人々であったと結論づけることができる。」[58]

「ハイドゥーの自由」を得た人間と，実際に定住を行った人間が完全に一致しないという事実から，決定的な不都合，不合理が生み出されるとは筆者には思われない。むしろ，ダーヴィドゥのこの指摘によって，これまで埋めたくとも，埋められないでいた「断絶」が，一瞬にして解消されたとの印象さえ筆者は受けるのである。

本節の冒頭において，従来のハイドゥー研究が見過ごしてきた問題，あ

るいは十分に考察がなされてこなかった問題を念頭に置いて，2つの問いを設定した。しかし考えてみるに，ハイドゥー研究が抱える問題点を正すために設定されたこれらの問いは，裏を返せば，ハイドゥー研究の進むべき方向，あるいは乗り越えてゆくべき課題を，暗にわれわれに示しているものであると捉えることもできる。つまり，農民的性格の強いハイドゥーを重視する視点からは，ハイドゥーの問題を農民問題との係わりの中で捉えてゆこうとする姿勢が必然的に生み出されるであろうし，また，各ハイドゥー町には，定住以前からの住民が一貫して存在し続けていたという事実，さらには7つのハイドゥー町に実際に定住を行ったハイドゥーの主たる部分は，当地の出身者であったとの指摘は，ハイドゥー町の連続性というものに対し，よりいっそうの配慮が必要であることを強く認識させてくれるのである。こうした観点から，今後のハイドゥー研究においては，人口統計学，民族誌学等を包括する学際的なアプローチ，あるいは地域研究を基礎とした社会史的なアプローチが極めて有効であると同時に，不可欠な手段として浮かび上がってくるようにも思われる。いずれにせよ，従来のハイドゥー研究が陥った誤りを検証した現在，ハイドゥーと見なすべき人間を考察の対象から除外したり，あるいは定住を行ってもいない人間の定住を語るといった「愚」を繰り返すことだけは，われわれにはもはや許されないのである。

註

(1) 拙稿「ハイドゥー研究における『断絶』と『不整合』――近世ハンガリーにおける社会集団ハイドゥーへの“定説”を踏まえて――」『史潮』新29号，1991年，61-74頁。本稿はこの補論をなすものである。

(2) 同上拙稿，64-65，68頁。

(3) 例えば，各ハイドゥー町の町史の出版が，この時期になされている（同上拙稿，70頁註(9)を参照）。

(4) *Dávid Zoltán:* A hajduk letelepitése[sic]. Történeti Statisztikai Tanulmányok 1. 1975.

(5) *Nagy László:* A hajdúk Bethlen Gábor habsburg-ellenes harcaiban. Magyar Történeti Tanulmányok VIII. 1975. (以下 Bethlen Gábor).

(6) *Nagy László:* Tünderkert fejedelme Báthory Gábor. Bp 1988; *Idem.:* Hajdúvitéz (1591-1699). Bp 1983; *Idem.:* A Bocskai szabadságharc katonai története. Bp 1961.

(7) *Nagy*: Bethlen Gábor, 45 old.

(8) U. o., 45 old.

(9) U. o., 44-46 old.

(10) ここでハイドゥーを専従兵士の集団であると記したのは，ナジの議論に即してのことであり，筆者はこの点に関しては，ナジとは見解を異にする。

(11) *Nagy:* Bethlen Gábor, 45-46 old.

(12) U. o., 46 old.

(13) こうした考えは，ベンダ・カールマーンやラーツ・イシュトヴァーンによって主張されている（*Benda Kálmán:* A Bocskai-kori hajdúság összetétele és társadalmi törekvései. In: *Módy György* (szerk.), A hajdúk magyar történelemben. Debrecen 1969, 31-32 old.; *Rácz István:* A hajdúk a XVII. században. Debrecen 1969.)

(14) *Nagy:* Bethlen Gábor, 46 old.

(15) U. o., 46 old.

(16) 1960年代末に至るまでのハイドゥー研究の成果については，前掲拙稿を参照。
なお，1975年の段階で示されたハイドゥー像とその定住に関するナジの見解は，1983年に出版されたHajduvitéz (1591-1699)（既出）の中でもほぼ完全に踏襲されている。

(17) *Komoróczy György* (szerk.): Hajdúdorog története. Hajdúdorog 1971; *Idem.:* Hajdúhadház múltja és jelene. Gyula 1972.

(18) *Dávid:* i. m., 5 old.

(19) U. o., 5 old.

(20) 原文で用いられている helység という単語は，place, locality といった意味と共に，community といった意味をも併せ持つ言葉である。ここでは後に展開されるダーヴィドゥの議論を鑑み，「集落」という訳語を付しておいた。

(21) *Dávid:* i. m., 6-9 old.

(22) ダーヴィドゥ論文に示された表との対照からは，ドログ60人，ナーナーシュ90人，ヴァーモシュベールチ25人の数字の妥当性は了解できるが，厳密に何故その数字となるのかは判断しかねる（*Dávid:* i. m., 10 old.)。

(23) U. o., 11 old.

(24) Magyar Statisztikai Közlemény. Uj sorozat 83 köt., 45-46 old.その内訳は次の通りである。

ポルガール	358.4	km^2
ベセルメーニュ	326.7	km^2
ナーナーシュ	266.4	km^2

ソボスロー	238.8	km^2
ハドハーズ	139.1	km^2
ドログ	103.4	km^2
ヴァーモシュペールチ	58.2	km^2
計	1,491.0	km^2

(25) *Dávid:* i. m., 11–12 old.

(26) 17世紀初めにハイドゥーが実際に定住した地域の面積は，上記の20世紀，18世紀の統計値に比して，より低い値として想定されねばならないというダーヴィドゥの主張自体は説得的であるが，具体的に500km^2を主張する根拠については一切触れられていない（U. o., 11–12 old.)。

(27) U. o., 12 old.

(28)「・・・サボルチ県にある，以前はわれらがトカイ城に付属していたカーロー町全体と，同じくナーナーシュ，ドログ，ヴァルヤシュの荒廃した所領，およびハドハーズ，ヴァーモシュペールチ，シマ，ヴィドゥという名の領地の一部を，彼ら（ハイドゥーたち――戸谷）に与えん・・・」

＜･･･nekik adományozzuk Szabolcs vármegyében fekvő, ezelőtt a mi tokaji várunkhoz tartozó egész Kálló városát, hasonlóképpen Nánás, Dorog és Varjas pusztabirtokaikat, Hadház, Vámospércs, Sima és Vid nevű részjószágainkat･･･＞ U. o., 6 old. 所引

(29) 例えばハドハーズに例を取るならば，1583年以降の租税台帳には，確かに *deserta* の文字が続いている（U. o., 13 old.)。

(30) U. o., 13 old.

(31) U. o., 13 old.

(32) U. o., 14–15 old. 例えば，1570年から連続して現れる *Sillye* の名は，1693年の対タタール戦においてハドハーズの住民を率いた *Sillye Ferenc* に連なると考えられるし，さらにハイドゥー地域最後の軍政官（főkapitány）であり，かつ最初のハイドゥー史の著者でもあった *Sillye Gábor* へも連なってゆくものと考えられる。

(33) U. o., 14 old.

(34) 定住したハイドゥーに関して従来の研究が抱える問題点は，代表的なものだけでも以下の3点が指摘されている。まず，1702年の租税台帳が伝える，総ハイドゥー世帯が689戸という数字から逆算すると，17世紀初頭に1万人ものハイドゥーが定住したという数字はいかにも多すぎるという点である。これは，17世紀中にハイドゥー町がこれほどの戦禍を被ったと想定することが可能であるのかという問題にも関連する。第二の問題点はソボスローへの定住に関するものである。定住者数が明確に記載されているソボスローを退けて考えると，他の6つのハイドゥー町には平均1,500人以上のハイドゥーが定住した計算となる。しかし，後世の都市規模を考慮するならば，ソボスローへの定住者数700人は，他のハイドゥー町のそれに比してあまりにも少ない数字であると言わざるを得ないのである。最後の問題点は，二番目のソボスローの問題点とは逆に，一般に考えられている定住者数はやや膨大でありすぎる

のではないかとの懸念である。つまり，1万人のハイドゥーに許された定住とは，実際には家族を含め3～6万人の定住が行われたことを意味し，17世紀初めの一地域への定住者数としては，この数字の持つ影響力はあまりにも過大であるというのがその内容である（U. o., 15-17 old.; *Rácz*: i. m., 30-31 old.）

(35) ダーヴィドゥによれば，当時のハイドゥー社会は青年層が主体であったために，「たとえ初発において世帯規模の平均が一般に妥当する指数を下回っても，家族は短期間のうちに補われ，ハイドゥー町の人口は，その後はもう年々速いペースで増加して」ゆく可能性を秘めていたという（*Dávid*: i. m., 17 old.）。

(36) U. o., 18 old.; ハイドゥー地域は1660年代にトルコ軍の大規模な侵攻に晒されるが，それ以前には，ハイドゥー町の発展をひどく阻害するような要因は見当たらない（例えば，*Dávid:* i. m., 21 old.; *Pach Zs. Pál* (szerk.): Magyar története 1526-1686. 2 köt. Bp 1985, 1016-1017 old.を参照）。

(37) *Dávid:* i. m., 18 old.

(38) U. o., 19 old.

(39) *Poór János*: A hajdúvárosok gazdasági és társadalmi helyzet (1607-1720). Hajdú-Bihar megyei múzeumok közleményei 9. 1967, 43 old.

(40) *Dávid*: i. m., 19 old.

(41) ちなみに，1784年のボルガールの人口は2,497人であった（U. o., 37 old. 87 jegyzet.）。

(42) 人口算定の具体的な手順については，U. o., 19-26 old. を参照されたい。なお，4万という数字はボチカイによって特権を付されたハイドゥー1万人の，家族をも含めた総数をいう。

(43) 前掲拙稿，68頁。

(44) 同上拙稿，62-64頁。

(45) ベセルメーニュにあるハイドゥー・ビハル県史料館（Hajdú-Bihar megyei leveltár）が保存するハイドゥー関係の史料は，そのほとんどがハイドゥーの定住以降のものである。

(46) その集大成が1970年代前半に相次いで出版された各町史である。

(47) 詳しくは前掲拙稿，64-65，68頁を参照のこと。

(48) 同上拙稿，65頁。

(49) 本稿第1節を参照。

(50) *Nagy:* Bethlen Gábor, 47 old.

(51) ボチカイ期のハイドゥーの3分の2が農民出身者によって構成されていたという指摘は，かなり以前からなされてきている――ただし当初は，農民出身者といっても，その主体は大平原南部出身の流民化した農民によって占められていたであろう，と理解する者が多かったが――（*K. Benda*, Der Haidukenaufstand in Ungarn und das Erstarken der Stände in der Habsburgermonarchia 1607—1608, Nouvelles études historiques I, 1965, S. 305）。

(52) *Rácz*: i. m., 118 old. 9 jegyzet.

(53) *Poór*: i. m., 7–8, 43 old.; Rácz: i. m., 96–97 old.

(54) ベンダやダーヴィドゥの研究は，ハイドゥーのこうした農民的性格を強調するのに貢献したのである。ベンダの見解に関しては，前掲拙稿の第2節を参照されたい。

(55) *Nagy*: Bethlen Gábor, 45 old.

(56) *Dávid*: i. m., 29 old.

(57) 例えば，U. o., 17 old.

(58) U. o., 18 old.

THE STUDY OF *HAJDÚK* IN HUNGARY: ITS PROBLEMS AND PROSPECT

《Summary》

Hiroshi Toya

In the last article the present writer conducted the study of *Hajdúk* before 1970 and pointed out the existence of "inconsistency" and "discontinuity" in the study. Taking these results into consideration, in this paper, the writer would like to articulate these "inconsistency" and "discontinuity" by means of comparing Nagy's and Dávid's articles, which are relatively new researches— both published in 1975— on *Hajdúk*.

In the last article we have come to know that the "inconsistency" came from Hungarian historians' narrower view of *Hajdúk*, which lurks in the study of *Hajdúk* before 1970, and that the "discontinuity" resulted from the attitude of Hungarian historians, who have never made any detailed research on the settlement of *Hajdúk*. Therefore, we can easily understand that we must give satisfactory answers to the following questions in order to overcome those "inconsistency" and "discontinuity".

1. What kind of people were called *Hajdúk* at the turn of the 17th century ?
2. What kind of people actually settled down in the *hét hajdú-város* ?

With regard to the first question, the present writer believes that we

should make much of the peasant elements of *Hajdúk*. Estimating the fact that thousands of peasants joined *Hajdúk* at the turn of the 17th century, or if we would like to find consistency in the history of *Hajdúk*, we have to understand that *Hajdúk* were the social group that consisted of two smaller groups. One group was those *Hajdúk* who kept their soldier elements strongly and the other was those who retained their peasant elements firmly.

To the second question, Dávid's article gives us many useful suggestions. He concludes that those *Hajdúk*, who were bestowed privileges by Bocskai and kept their soldier elements strongly, were unwilling to settle down, and that some of those who actually settled down in *Hajdúk*-villages could be the former village community members who had once left there to take part in the Bocskai's army. His conclusion can be a proper answer to the second question.

Hereafter, more interdisciplinary approach and more socio-historical approach would be needed in the study of *Hajdúk*.